

華北根拠地の詩運動

秋吉, 久紀夫
福岡女子大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/9800>

出版情報 : 中国文学論集. 5, pp.62-75, 1976-03-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

華北根拠地の詩運動

秋 吉 久紀夫

丁玲が主任の第一次「西北戦地服務団」には、五人の記者が通信組にいた。史輪もそうであったが、次にあげる田間も同様であった。かれは一九三八年二月、山西省臨汾で加わった。當時かれは期待される詩人として既に文壇の注目を浴びていた。本名を童天鑑といい、一九一六年安徽省無為県に生まれた。一九三四年ごろ上海の光華大学に学び、進歩的な文学団体に加入し、詩誌の発行編集にたずさわった。一九三五年に詩集「未明集」、『中国の牧歌』『中国農村の物語』を、矢つぎ早やに刊行した。一時日本に滞在していたが、日華事変勃発前に帰国、ただちに抗日戦に参加した。(一九三七年の海)『七月』第四期一九三七年十二月一日)

かれは上海から武昌に到着、長詩「戦士へ」(給戦闘者)を『七月』第七期に発表した。

戦士へ

灯火あかりもない

火の気もない夜なか、

日本の強盗が
やって来た、

ぼくらの

手から、

ぼくらの

懐から、

罪もない家族を奪い

暴虐な柵のなかに閉じこめた。

かれらは

真裸のからだに

傷跡をみせながら、

かれらはいつまでも

憎しみに

息をはずませながら、

ふるえている。

大連で、満洲の

野営で、

酒をおおり
肉を食らう

残忍な野獸たち、

やつらは自分の力で

なぶっている――

荒れすさんだ

生命を、

飢えている

血を……………(以下略)

「西北戦地服務団」へ入るために北上、臨汾で目的を果した直後、臨汾で二月十四日「晚会」を、三月潼関で「五人」を、

さらに、三月二四日西安で日本の「V・M女士へ」を執筆した。

さらに六月一日「子どもの日――子どもの日の大会での朗誦のために作る――」を西安のその日の集会で朗誦した。

西安滞在中に、かれのもう一つの仕事は、長篇叙事詩「彼女のうた」の第二回目の定稿を五月三十一日に終えたことである。この詩は原名を「彼女も人をやっつけたい」(她也要殺人といい、のち、一九四七年二月、上海の海燕書店から刊行した。B6版で八九頁の分量である。あらずじは次のようなものである。

「抗日戦が開始されて、日本軍が突如あらわれた山西省のある村に、白娘という若妻がいた。彼女は多勢の日本兵に捕えられ必死で抵抗したが、強制的に暴行をうけた。そのうえ、いとしい吾子までも殺されてしまった。それも火で焼かれたのである。彼女は生まれてこのかた、蟻一匹でさえ、踏み殺そうとし

たこともなかったのに、村を焼かれ、家を焼かれ、一切を瞬時に灰と化されてしまった。羞恥、残酷、苦痛を、彼女は乗りこえて、夜中ひそかに脱走し、ついに村の抵抗戦線へ辿りついたのであった。」

この長篇叙事詩は、抗日戦のなかで、被害をうけた中国農民が、苦しみのなかからやがて覚醒してゆくプロセスを描いたものである。

田間の詩は、この作品からも解るように、非常に戦斗的である。決して廻りくどい表現方法はとらない、明快素朴である。畳みかけるようなリズムをもった切迫感がある。その特徴は、朗誦形式にもっとも適応する軽快さである。

ところで、田間が西安で長篇叙事詩を定稿した理由には、いろいろあるが、直接的に刺戟を与えたのは、延安にいた先輩詩人柯仲平が発表した「辺区自衛軍」(一九三八年五月一日)というやはり、長篇叙事詩であった。この詩は「解放」週刊第四一・四二期に連載された。柯仲平はこの作品の発端を、陝甘寧辺区の労働者第一次代表大会で、労働者代表林光輝から聞いた。それを、文芸の方向である抗戦的、民族的、大衆的に沿って、内容と形式とに統一したもので、長篇朗誦詩として、民間歌謡のリズムを応用した。といい、再三延安での集会で朗誦したとのべている。(「辺区自衛軍、平漢路工人破壞大隊」一九五四年四月、人民文学出版社刊頁)

その内容は、
辺区自衛軍の小隊長である李は、王三という男が、秘かに日本軍と通じる漢奸で、馬福川一帯の破壊活動に動いているとに

らんで、搜索していた。ある夜、かれの信頼する部下の韓娃が境界線の見張りに立った。真夜中、二つの黒い影が目の前で動くのを感じた。即刻、大声で誰何して身分証明書を要求したが、所持していない。さては敵側漢奸だと察したが、何分味方はいないし、武器は槍一本だけだった。その時李小隊長が、かれを案じて駆けつけてくれた。二人の漢奸は郷政府から県政府へ廻され、かくて遂に王三は間違はなく、漢奸の親玉であることが暴露されてしまった。辺区自衛軍を構成する農民たちは、裁判が終ると、一斉に声をはりあげ行進するのであった。「辺区をまもれ、抗日根拠地をまもれ、西北をまもれ、全中国をまもれ」と。

柯仲平は、かつて郭沫若や成仿吾らの創造社に属していた詩人であったが、戦争の開始と同時に、上海から武昌、漢口を経て、一九三七年冬に延安に到着し、文化界救亡協会の仕事をしていた。この柯仲平が朗誦詩の提唱者の一人であった。

朗誦詩はまず一九三七年十月、武漢から湧き起った。魯迅の逝去一周年記念大会からである。この大会で、王瑩女士の「魯迅悼詩」の朗誦につづいて、柯仲平は演説のなかで、数篇の朗誦を試みた。朗誦詩はこれを起点として全国に飛火した。延安のある陝甘寧辺区では、かれが赴いたのち、一九三八年一月、陝北公学の新年晩会で、かれ自身によって火がつけられた。計画は一九三七年十二月末、呂驥、林山、柯仲平が「戦歌社」を結成したときに練られていた。（『七月』第九期、一九三八年二月十六日「關於詩歌朗誦・実験和批判」）

柯仲平は、「辺区自衛軍」のあとに、一九三八年十二月十二

日、同様の長篇叙事詩「平漢鉄道労働者破壊大隊の誕生」（平漢路工人破壊大隊の産生）を執筆し、「文艺战线」第一巻第一号・第二号（一九三九年二月・三月）に第一章を発表した。この詩名はのちに「平漢路工人破壊大隊」と改められた。

「平漢鉄道破壊大隊」は、当時実際に存在した組織であった。平とは北京のこと。漢は漢口、北京から漢口にいたる幹線鉄道のことを平漢路といていたが、この沿線の農民あがりの労働者は主に瓦辛店と李家集を中心に、鉄道破壊大隊を一九三八年九月ごろ組織化し、日本軍の軍需物資等を満載した機関車、レール、電線等の爆破、切断などをおこなった。一九三八年九月十四日、濬県で列車転覆、九月二二日に、宝蓮寺で日本軍用機関車二輛地雷で爆破等、これらによる事件が続出した。統計では、この大隊は一九三八年九月から三九年十月まで一年間に、破壊工作一八八回、爆破一機関車九五、車輛三五〇余、鋼鉄車一八、戦車六、装甲車三、橋二五、電線切断七八〇メートル余、レール破壊一三〇余キロメートルにのぼったといふ。（『劄記「平漢路員工鉄路破壊隊」一九四〇年六月一日「民主与文艺」第一輯、海燕文艺双刊社、海燕書店、香港蓮花街二十三号刊一三〇頁）

柯仲平の「平漢鉄道労働者破壊大隊」は、この大隊の「真人真事」を歌ったものである。「李阿根と老劉をリーダーとする「平漢鉄道労働者破壊大隊組織準備会」は、敵側の官警軍隊の目をかすめて、着々と進行していた。やがて各人がまとめた名前の集約の日がやって来た。小王五、麻子、小黑炭、崔得寿、堂信、老萬らは、李阿根をなかに、約束の時に約束のところで落ちあった。だが老劉はあらわれなかった。居合せたものは、

かれが第二組合に寝返って、裏切ったのではないかと疑った。李阿根は熱心にかれらに説得してかれを待った。やっとのことと姿をあらわした老劉は、さきの七人が組織した一三〇〇余人の六二三人を、ひとり取りまとめていた。こうして老劉と李阿根を中心にした二〇〇〇余人の破壊大隊の英雄的な陣容が、結成されたのである。」

「平漢鉄道労働者破壊大隊」と「辺区自衛軍」は、一九三八年読書生活出版社から刊行された。この二詩集と、さきの田間の「彼女のうた」は、一九三七年十月に開始された朗誦詩運動の陝甘寧辺区における成果である。

ところで、柯仲平は朗誦詩の理論を次のように把えている。「朗誦は、講話（話をする）と、歌唱（歌をうた）のあいだに位置するもので、もっとも律動（律動運動）に富んだ一種の音声芸術である。朗誦の最初の基礎は、講話であり、言語である。講話は、ひとに自分の言わんとする内容を理解させ、ついで感動した聴者の情緒が、聴者の行動というはたらきを組織する。だが、朗誦は講話に比較すると、歌唱の方に近く、そのうえ旋律的運動に富んでいる。朗誦の第二の基礎は、歌唱であり、音楽である。まったく旋律運動を中心として、ある種の内容を伝達させ、聴衆をその旋律運動のなかでは、無私の感動に浸らせる。ただ朗誦は歌唱に比較すると、それは講話の方に近いものである。」

さらに朗誦性に富んだ詩歌は、以下の三つの条件を具えることが必要だという。

「一、内容は真実であり、もっともよく大衆を感動させるこ

とができ、高度な教育意義を所有していること。

二、使用する言語は、大衆化されたものであること、——一方では大衆にたやすく受け取られるものであり、一方では、かつて大衆の文化をたかめることのできる言語であること。

三、律動に富む組織をもっていること。」（「關於詩歌朗誦；実験和批判」『七月』第九期、一九三八年二月十六日）

つまり、抗日戦争という非人間的な残酷な状況のなかに、投げこまれた人間たちが、この非人間的状況を排除させるには、より人間性を志向する人間集団の結合組織化が、必要欠くべからざる条件である。それはことばによるより適確な連帯の形成にある。文学という分野が、極く少数の限られたインテリ層にのみ享受されていて、切り離された状態にある絶対多数との間にギャップが、生じている場合にはこの溝を埋める作業はなされなければならぬ。それは印刷技術、印刷諸条件の満たされない環境とともに、朗誦詩という形式を生みださずには、おかなかったのである。抗日戦争という避けることのできない現実とは、詩人たちに、訴えかける対象を明確にさせ、訴えかけることばと、形式を発見させたのである。この朗誦詩運動によって、詩人を拘束していた密室が、解放され、詩人が一般人のなかに接近し、かれらに夢を与え、抗日戦に参加させるよう働きかける作用を惹き起したことは見逃すことはできない。ただし、一般人とはだれかを考えでみると、ほとんどは知識人層であったということは、否定できないことであつた。

詩が、その原初的なリズムと、力を所有するためには、ただ印刷という機器によって、文字を書くのみで足れりとされるに

至った状況から、適行して「朗誦する」だけによってでは、根本的に解決はできない。「朗誦」はそういう意味では、過渡的産物だということができる。柯仲平や、田間らは、「彼女のうた」や、「辺区自衛軍」「平漢鉄道労働者破壊大隊」等の朗誦詩形式の成果を発表したが、やがて現実の深化は、かれらを次の形式へと導き入れるのである。同時に一より多へは、ここを軸にして飛躍するのである。

田間が延安に着いたのは、「西北戦地服務団」の延安帰着と一緒の一九三八年夏であった。

一九三八年夏、延安は「街頭詩」で街じゅうが賑わっていた。

「一九三八年八月七日、延安城内は、大通りといわず路地といわず、土塀、城壁に、街頭詩が貼り出された。大通りの中心部には、数個の紅い幕が掛かり、それにも街頭詩が書かれていた。街頭詩があらわれると、まちがいに、多くの紅ふさのついた槍を持った自衛軍の兵士が、土塀の前に立ちどまって詩を読んでいた。」(田間『海燕』一九五八年四月、北京出版社刊四七頁)

延安の在住の詩人たちは、一九三八年八月七日を「街頭詩歌運動日」と決めて、全城市を詩で埋めたのであった。発起人は、田間をはじめとするメンバーで、「街頭詩歌運動宣言」で、次のように呼びかけている。

「有名、無名の詩人たちよ、村のひとならびの土塀も、路傍の一片の岩石をも、そのままにしておくな、集会での雰囲気、間のびした、活気のないものにしておくな、書こう、抗戦を、民族を、大衆的な作品を。うたおう、抗戦を、民族を、大

衆を。われわれは、抗戦の勝利を奪い取るこの時代において、全中国から偉大な抗戦の詩歌運動を繰りひろげなくてはならぬ。われわれは認める、街頭詩運動こそ、詩歌を抗戦に役立たせ、大衆詩歌創造のひとすじの大道だということ。」(前出四九頁)

かれらは街頭詩を書いた、

おれの土地(我的土地)

田間

同志よ、みてくれ、——

これはおれの土地だ、

おれは麦を播かなくてはならぬ、

おれは稲を植えなくてはならぬ。

やはりそれを留めねばならぬ、

おれの子孫のために、

よくよく肥やしておくのだ。

けっして敵めに

奪われてなるものか、

延安にて、一九三八年

(詩集「誓詞」一九五九年一月
上海文芸出版社刊 九頁)

抗戦のなかで(在抗戦里)

史輪

抗戦のなかで、

ぼくらの失ったものは何か

それは——

武器につく錆と
民族の災難

それに懶け根性もだ／＼

甘谷駅と清淵のあいだの岩にかゝ

(田間「海燕嶺」四九頁)

一九三八年秋、田間は文協会会の工作のために、晋察冀へ派遣された。かれは連日、邵子南や史輪らと、標語筒をもち、白墨で、木炭で、家々の門に、大きな岩に、砲弾で崩れた土塀に、街頭詩を書きつけた。

ところで、晋察冀辺区とは、山西省、チャハル省、河北省の三省にまたがる一帯を総称することばで、華北最初の主要な抗日根拠地が樹立された地域である。

一九三七年十一月八日の太原が、日本軍に占領されるまでは、中国共産党軍、すなわち八路軍は、国民党軍と呼応して作戦していたが、それ以後は怒濤のように敗走する国民党部隊とは別個行動をとりはじめた。かれらは「華北人民と生死を共に」「敵の背後で遊撃戦を」「抗日根拠地の建設を」などの政策を、実行しはじめ、日本軍の背後に強力な根拠地を創設しようとした。十一月十一日に八路軍総司令部は決定した。第一一五師団は、聶榮臻副師団長が、晋察冀に留って堅持する外、主力は汾河流域と山西省南部へ移動し、敵の前進を阻むこと。第一二〇師団はやはり太原附近にとどまり、山西省西北部を切り拓く任務を担当すること。第一二九師団は、山西省西南部にいたり、遊撃戦をおしすめ、解放区を建設することを。

聶榮臻とともに晋察冀地区五台に残留した八路軍勢力は、わ

ずか独立一個連隊、騎兵一個大隊、それに不完全な二個中隊の計約二〇〇〇人であった。晋察冀軍区はこうして樹立された。軍区司令聶榮臻、政治主任舒同。この抗日根拠地は日本軍の背後にあるため、一切の外からの援助を期待することは不可能であった。だがかれらは根拠地作りに懸命にとり組んだ。二〇〇〇人の八路軍は各地に工作団を派遣した。これを中核として戦地動員委員会(ごころ)によって救国会、自衛会を組織した。いたるところに敗走した国民党軍の投げ捨てた武器があった。また一方、生命を維持しようとする人民大衆がいた。条件はととのっていた。たちまち自分らの村を防衛する武装集団が結成されていった。阜平では、第一路抗日義勇軍が旗をあげた、一月月のうちにこの勢力は数千人の部隊にふくれあがった。易県では、中共の地下黨員の持っていた拳銃三挺で、一月月もたないうちに、三〇〇〇人の部隊が成立した。各地から続々と八路軍へ幹部となれる人の派遣を要求してきた。止むを得ず、老若の戦士をとわず、護衛兵も、勤務員も、炊事係から飼育要員まで各地の指導員となった。

晋察冀各地の戦地動員委員会は、民衆を指導する一方、「小作料と利子の引下げ」「年貢の徴収停止」「重税の撤廃」「抗日戦士の家族の優先的待遇」を実行し、「力のあるものは力を、金のあるものは金を出す」という合理的負担を実施した。

たとえば阜平では、貧乏人は、山の樹の葉を食べる権利さえ過去には奪われていた、樹が地主の所有だったからである。

動員委員会は、地主と農民とのあいだにはいって、ともに語り合って双方の意志を尊重し、樹の皮は地主の所有だが、樹の葉

は農民でも食べる権利をもつ、との共同決定を下した。(『抗日戦争時期的中国人民解放軍』三四頁) こうした努力の末に、一九三八年一月十日、阜平で晋察冀辺区軍事政治人民代表大会が成立し、晋察冀辺区行政委員会を民主的無記名投票で選挙した。九名の委員が選出された。宋劭文(山西省第一区政治主任)、聶榮臻(辺区軍司令)、劉奠基(国民党代表)、呂正操(河北省中部五三団团长)、胡仁奎(孟県県長)、李杰庸、孫志遠、張蘇(蔚県県長)、婁凝先(山西犧牲救国同盟特派員)である。代表大会の代表は一九九名で、晋察冀辺区三九県、一〇〇余万のひとびとを代表していた。

こうして全国的に注目された華北の主要抗日根拠地——晋察冀辺区——は創設されたのである。「この辺区の中心区域は、平綏・平漢・同蒲・正太の四つの鉄道に挟まれた間にあって、一九三八年四月時点では、蔚県・広靈・渾源・応県・涞源・靈邱・繁峙・五台・代県・惇県・忻県・定襄・阜平・曲陽・唐県・完県・易県・徐水・滿城・孟県・寿陽・平定・井陘・平山・行唐・靈寿など二六県を含み、他になお平漢・津浦の各鉄道、および滄石公路の間にある高陽・無極・藁城・深沢・安平・饒陽・安国・博野・蠡県・肅寧・河間・任邱・大城・文安・滄県・新鎮・安新など一七県を含み、四〇余県であった。」(劉清揚陳北鵬「保衛華北的遊撃戦」一九三八年七月、生活書店刊三頁、陳昌浩「成爲抗日根拠地的冀察晋辺区」『解放』第三五期一九三八年四月二〇日、勁草書房刊『中国共産党資料集』第九卷一三五頁参照)

だが猛烈な日本軍の砲火は、連日のように晋察冀辺区で轟き、彼我の攻防戦は熾烈であった。一九三九年二月九日夜、日本軍は九手に分かれて、五台北岳区を攻撃、さらに三月一日か

ら三月二二日にわたって、北部山西省大掃討戦を、四月一六日から七月四日の二ヵ月半、五台大作戦を、日本軍は展開していた。(防衛庁防衛研修所戦史室「北支の治安戦」(1) 昭和四三年八月朝雲新聞社刊一三三頁)

一九三九年のある日、とおりかかった田間は、とある村の門樓に、とてつもない大きな文字で、彼自身の詩が書き付けられているのをみて息を呑んだ。傍には両まで副えてあった。その詩は延安での作品であった。

たとえおれたちが戦わなくても(假使我們不去打仗)

たとえおれたちが戦わなくても、

敵は銃劍で

おれたちを刺し殺ろす、

そしておれたちの骨を指さして言うだろう、

「見ろ、

これが好隸だ」と。

(『抗戦詩抄』一九五〇年三月、新華書店刊三頁)

これは田間に、強い衝撃を与えた。「これはほくに街頭詩の偉力を悟らせ、またこれは人民がぼくらとよく自身をはげましているのだと悟った。」(『海燕』五〇頁)

ここで田間の街頭詩は、ただ単に他へ押しつけるプロパガンダ的要素から、よりかれ自身の内部の詩精神の燃焼の結果として、憤出しはじめた感がある。この短かくて精神な形式は、まるで圧搾された空気のように、鋭く弾けた。

防衛戦（保衛戦）

もしばくらの村が、

突然

包囲されたとしたら、

老婆よ、

子供よ、

ひとり残らずなぐり込め、

（いずれ死ぬのだ）

たとえ死んでも、

屍は故郷にいて、

生きてるように歌をうたう、

一九三九年

（『給戦闘者』一九五四年六月
人民文学出版社刊、四五頁）

堅壁（堅壁）

強盗め、

おまえがおれに、

銃は、弾薬は、

どこに埋めてあるかとたずねたら、

よし、おれはおまえに言ってる、

銃も、弾薬も、

みんなおれの心のうちに埋めてある、

一九四三年六月作（『抗戦詩抄』五頁）

田間のこれらの作品は主として晋察冀辺区の「詩建設」に掲

載された。「詩建設」は、一九三九年三月創刊された週刊詩誌である。編集は田間、邵子南、方冰等の戦地社（前に述べた西北戦地服務団内の文芸研究会）があたり、出版名義は西北戦地服務団、発行責任は晋察冀軍区第一軍分区政治部となっていた。つまり八路军軍所属の文学機関である。晋察冀での第一軍分区は、司令楊成武、副司令高鵬、政治主任羅元發指揮下であった。管轄県は、易・涑水・涑源・定興・徐水・蔚・陽原・広靈・靈邱・渾源の各県である。（『剿共指針』第百附録、昭和十六年十一月一日発行、黄城事務所）

「詩建設」の外に詩誌に、「辺区詩歌」「詩戦線」「新世紀詩歌」などが発行されていた。むろんすべてガリ版刷りである。詩を掲載していた新聞には、「子弟兵」「抗敵報」（のちに「晋察冀日報」と改名、雑誌に「北方文化」「抗敵画報」などがあり、木版画とタイアップした詩を掲載することもあった。詩人グループには、外に魏巍、錢丹輝らの「鉄流社」や「海燕社」などが活躍していた。かれらは、晋察冀辺区という日本軍背後の抗日根拠地で、火のように意欲的に、疾風のように、すばしっこく戦列のなかで、作品をかき、土堀に、岩上に、村の門樓に貼り出し、日本軍の苛酷な攻撃のなかでは、地下壕の薄暗い灯の下で、藁半紙に自製のインクで、騰写しつづけていたのである。

次に、二・三晋察冀の詩人の横顔を眺めてみよう。

魏巍——前述した「鉄流社」の中心である。かれは一九二〇年河南省鄭州の貧しい家に生まれた。幼年期はだから不遇のうちに過した。一九三七年、十八才のとき日中事変がおこり、た

だちに山西省に赴き、八路军に参加し、晋察冀辺区の遊撃隊員として活躍していた。

高粱が伸びたぞ（高粱長起來吧）

夏がやって来ると戦士たちはこう口ずさむ

高粱が伸びたぞ

高粱が伸びたぞ

ぼくらは線路のひがしへ行かねばならぬ
さああの大平原のあたりに出かけるんだ

大平原よ

一望千里見渡すかぎり果てのない

みどりなみうつ海よ

ぼくらはあそこへ身軽に出かけよう

ぼくらの短い騎兵銃を背負い

手榴弾を腰にかくし

ついで保定の城市にまで出かけよう

ながいこと見ない城市

ながいこと見ない街道

ながいこと見ないもの売りの声よ

ながいこと見ない故郷に

会おう、そうだきつと

あその年寄りや弟や少女たちが
頬を寄せてぼくらを待っているはずだ

おお、山よ

おまえは咲き乱れる野花で
いつまでもほくをひき留めることはできぬ

草木の伸びる夏こそ

ゲリラを放つに最良の收穫期だ

高粱が伸びたぞ……………

一九三九年五月

（魏巍『黎明風景』一九五五年四月、人民文学出版社刊、二頁）

魏巍は当時の状況を「黎明風景」の後記に述懐している。

「あの戦いの激しい日々に、人民の感情が深まるにつれて、次第に晋察冀の山々や溪流が、晋察冀の戦士と人民とが、ぼくの詩の世界に滲透して来た。……ぼくは一日か二日に一篇詩をかいた。夜行軍のうちに思索し、露宮の夜明けとともに記した。飢餓も疲労も殆んど感じなかった」と。

陳輝は、本名呉盛輝、一九二〇年湖南省常德県に生まれ、一九三八年、十八才の時延安に着き、八路军に加わった。翌三九年五月晋察冀抗日根拠地におもむき、四一年涞涿地区青年救国会主任、地区委員会書記、武工隊政治委員等を歴任し、前線をこえ敵占領地区にまで侵入して工作していたが、一九四四年二月七日、北京近郊で不覚にも日本軍に包囲され、遂に戦死した。年僅かに二四才であった。次の詩はもっともかれの詩の特徴があらわれたものである。

まんじゅう売り(売糕)

——何処へ行くのか?——

——まんじゅう売りだ。

——ついでにもう一度こいつを

城内にばらまいて来てくれ……

まんじゅう売りは

油でうす汚れた掌を伸ばして

色とりどりの小さな伝單の這入った

大きな袋を受け取って行つた。

(まんじゅうの下に用心深くそれをかくして)

——まんじゅう、まんじゅう!

彼はホカホカのまんじゅうをかつき

銅鑼をたたきながら

城内に消えて行つてしまつた

ちようどひとすじの炎のように……

一九四〇年ごろ

(陳輝「十月的歌」一九五八年六月、作家出版社刊 四九頁)

作者はこの詩稿の空所に左の走り書きを書き込んでいた。

「この七篇の詩は八区で書き、早速ガリ切りして、翌日口底で激戦があつたとき、ぼくはそれを唐県城外三里の村々にばらまきにいっただ。ぼくはそれを幾粒もの火種のように城内に播かうとしたのだつた。」

次の詩は、若くて戦いのなかで敵を殺すしか知らないようなかれの心底に、敵をも超えた暖かな人間感が、ほとばしつていた事実を確認させるものである。だからこそかれの作品は、ひとを引き入れる強い力をもっているのだろう。

ひとりの日本兵(二個日本兵)

ひとりの日本兵が

晋察冀の原野で息をひきとっていった。

彼は眼窩に

赤黒い血を凝固させ

あふれるばかりの涙を充たし

悲しみを氷結させていた。

彼の手は力なく

正義の弾丸に

射ぬかれた若い胸部に

あてがわれたままだつた。

ふたありの農夫が

鍬を担いでやって来て

彼を華北の岡の土に埋葬した。

彼を覆った異国の黄土が

農夫のきいろい鼻面に匂っていた。

中国の雪は音もなく
彼の墳墓の上に降りていた。

このうら淋しい夜中

とおい海をへだてた故郷の寒村では

腰の曲った老婆が

白毛まじりの髪を乱して

いっしんにはるかな戦地の息子の無事を
祈っているにちがいない……

一九四〇年ころ

〔十月の歌〕二六頁

方冰の経歴はさだかでないが、田間らとともに「詩建設」を編集したメンバーの一人である。一九五七年九月、晋察冀辺区期の作品を集めた詩集「たたかう村」（戦斗的郷村）を作家出版社から刊行した。左の詩は、そのなかのものである。

歩哨に立って（隨哨上）

陽がとっぷりと沈むと、

夜が太行山に降りてくる。

星は空でかがやきはじめ、

灯は村でかがやきはじめる。

晋察冀よ！

ぼくは銃を担ぎあなたを護っている。

あなたの糸ぐるまの側の若妻、

あなたのかたわらで寝入っている子供。

そして暖かい炕の端に坐っている、
頭じゅう白髪だらけの年寄り。

はるかばくは家を思い出し

この上もなくあなたが慕わしい。

ぼくはこの冬の夜のきびしい寒さも恐くない、

ただあなたたちが安らかに眠れさえすれば！

一九四二年五月 平山燕尾溝

〔戦斗的郷村〕一三頁

華北全戦線にわたって、八路軍部隊一一五個連隊が、一斉反攻に転じたのは、一九四〇年八月二〇日夜からであった。十月下旬まで二カ月もの間、激烈な死闘が繰り返されたが、ひとたび潮が退くと、逆に日本軍の猛烈な掃討戦が開始された。一九四〇年十月十三日から十一月下旬の晋察冀肅正作戦、四一年五月二十九日から七月二一日の冀東作戦、四一年六月十日から中旬の北部冀中作戦、そして遂に一九四一年七月からの日本軍華北総司令官岡村寧次大将による三〇万の日本軍投入の「三光戦術」が、火蓋を切った。いわゆる「皆殺し」「焼き尽し」「掠め尽す」という残酷な政策である。徹底的な中国人皆殺し作戦であった。この戦術は長期にわたって実行された。一九四一年八月から十月中旬の晋察冀辺区肅正作戦、一九四二年二月から三月の晋北西地区肅正作戦、五月から六月の冀中作戦などすべてその延長線上のものである。

平山は北部太行山の南、滹沱河の流域にある河北省の県城である。この城市も日本軍の血のしたたる銃剣と軍靴によって蹂躪された。方冰は歌っている。

ぼくはこの眼で見た（我親眼看見的）

ぼくはこの眼で見た！

あの野獸たちが、

村のはずれの大通りで、

ひとりの可愛い子どもをさらったのを。

子どもはやっと二つか三つ、

大通りのうえで哭きじゃくっていた。

大声あげて母親をよんでいた。

ぼくはこの眼で見た！

あの野獸たちが、

あの子をぶらさげたのを、

一羽の鶏よりもやすやすと。

やつらはあの子をぶらさげたまま、

脚を上、頭を下にして、

焚火めがけて歩いていった。

ぼくはこの眼で見た！

やつらは焚火に近寄ると、

あの子を火のなかに投げ入れた、
手をも震わすこともなく。

ちいさな手は幾度かひらひらした。

ちいさな脚は幾度かじたばたした。

濃い煙が焰を巻きあげた。

ぼくはこの眼で見たぞ！

ぼくの心は刀ではげしく切り裂かれる思いだった。

ぼくの全身が火のなかで焼けそう、

ぼくはまったく堪えられない！

山よ、河よ、

吹く風よ、流れゆく雲よ、

きみらが証人だ。

ぼくらは仇をうたねばならぬ！

どれほど多くの子どもたちが、

このように野獸たちに虐殺されたか知れぬ、

——ぼくらの血をわけた骨肉よ！

山上の岩石よ！

おまえたちはいっせいに炸裂せよ、

いっせいに炸裂せよ！

あの人間性を喪失した畜生どもを爆死させるのだ！

一九四二年八月 五日平山県燕尾溝にて

〔戦斗的郷村〕一五頁

わかい女を強姦し、わかい男の頭の皮を剥がし、柳の木でひらひらと人間の皮が幾枚も風に揺れ、日本軍の撤退した村には、「一軒として完全にととのっている家はない／ひともととて突立っている樹木もない／ひととして揃った家具はない……井戸のなかは死体／あなぐらのなかもすべて死体」〔長篇叙事詩「粟堡」〕一〇〇〇余人の村びとたちが一日でみなごろしにあい、そのしたたる血が、ちいさな村の広場の地面を、川となつてそろりそろりと流れてゆく。「血は／土と砂にしみとおり／血は平陽河を真紅に染めた」〔平陽鎮をよぎる〕

全篇、日本軍に対する烈火のように燃える憤怒が溢れ、とうとうとのたうち狂っている感じである。だがどんなにいかり狂っていても、その眼は事実を冷徹にながめる眼差である。

当時の晋察冀抗日根拠地で、活躍していた詩人あるいは詩人の卵は、上にあげた以外に夜空に輝く星のようにいた。

勞森、かれは広東省三水県の人であった。一九三七年廣州より北上し、一九三八年一月西安から安塞の青年訓練班に入り、さらに抗日軍政大学で学習、一九三九年春、延安の「山脈詩歌社」に加入、七月抗日軍政大学総校とともに、晋察冀辺区に到着、一九四二年一月病死した。二四才だった。

任霄、彼女は湖北省武昌市の人で、やはり抗日軍政大学総校

とともに晋察冀辺区に至る。詩を「詩建設」に投稿。一九四一年十一月、河北省曲陽県で日本軍に逮捕され、若くして殺害された。

雷燁、一九一七年、浙江省に生まれた。一九三八年秋、八路軍総政治部が、前線記者として晋察冀辺区に派遣した人物で、冀東軍分区組織科長、晋察冀辺区参議員に当選。一九四三年四月、河北省平山県で戦死、二六才だった。

司馬軍城、本名は牟倫揚。一九二〇年湖北省利川県に生まれた。一九三七年抗日戦と同時に北上し、陝北青年訓練班に参加。陝北公学入学、のち「晋察冀日報」編集担当。一九四四年夏戦死。二四才であった。

その他、曼晴、徐明、孫肇、刑野、陳隴、林采、流笏、商展思、章長石、張克夫、胡可、姚遠方、王煒、張慶雲、孟亞、鄭康などがいた。〔魏編「晋察冀詩抄」一九五九年三月中国青年出版社刊。〕

かれらは日本軍背後の根拠地である晋察冀（山西省・チャル省・河北省にまたがる地区）辺区の全地域で、昼夜を分たぬ戦斗の合間を惜しんで、街頭詩を貼り出し、伝單詩（ヒラ詩）を敵占領区にばらまき、到る処の集会で自作の詩を朗誦していたのである。

かれらは殆どがわかものであった。詩人でなく戦士であった。詩は戦うための武器であった。ひとびとへの訴えであり、ひとびとに勇気を与えるものであり、また自己をきびしく凝視するものであった。二四才で日本軍に殺害された陳輝は、その遺稿「ぼくの志願書」で次のように云い残していた。

「ぼくの歌ごえは、甲高い、鋼鉄みたいに硬くて力をもって
いる。それはぼくの世界が戦いのさなかであるためだ。ぼくの

歌ごえは自由だ、海燕みたいにあらしのなかを飛んでいる。どんな形式も束縛することはとうていできぬ、またどんな鉄の水門でも、白日の到来を避ることができぬように。ほくの歌ごえは勇敢だ。戦士のように、弾雨のなかを決して避けることなく、前足あげて突進する。ほくの歌ごえは——火と燃える情熱と生きいきとした現実とで充たさねばならぬ。」と。

（『十月的歌』二四九頁）

一九七五年九月稿